

グリーンスクールを通して子どもたちの視点を知る

檜山森林管理署

腰越 玲翔

1. 課題を取り上げた背景

檜山森林管理署では「砂坂海岸林」を「遊々の森」に指定し、江差北小学校を対象にグリーンスクールを開催しています。そういった取組みに対し、体験した子どもたちはどう感じているのか、また、今後どうしていけば効果的に森に関心を持ってもらえるか知りたかったので、この課題を設定しました。

2. 取組みの経過

平成24年10月26日に行ったグリーンスクールに参加した児童を対象に、4項目のアンケートをとり学年ごとに集計しました。

質問項目は以下のとおりです。※（）内は選択肢です。

①森はどんなところだと思いますか？

(楽しく遊ぶところ・勉強になるところ・こわいところ)

②森に行くことはこわいですか？

(怖い・ちょっと怖い・あまり怖くない・全然怖くない)

③森の好きなところを教えてください。

④グリーンスクールで思い出に残ったものの絵を描いてください。

3. 実行結果

アンケートから森は「学習するところ」という印象が全体的に強く1年生においては「遊ぶところ」だと認識していることが分かりました。

「森は怖いですか？」という質問に対しては、4・6年生は森が怖いと思う児童が多く、1・2・5年生は怖くないと思う児童が多い結果となりました。3年生は怖いと・怖くないと思う児童が半々でした。

「森の好きなところを教えてください」という質問では、生き物に関する意見や、実用的な意見、森林の機能に対する意見がでました。

「思い出に残ったものの絵」では、低学年はみんな同じもののかきたがる傾向にあり、中学年は木工で作成したものの絵・高学年は学んだことや驚いたことなどを絵にしてくれました。

4. 考察

低学年の児童は、描かれた絵の傾向からマネやみんなと同じことしたい気持ちが強いのではないかと考察しました。また「森は楽しい・遊べる」と思っている児童が多いことから、森の中でゲーム要素の強いプログラムを行い、その気持ちを発展させていくことが重要だと思われます。

中学年の児童は、森に行くことがこわいと思う生徒が多いことから森の利点や実際に自然のものに触れたりする学習プログラムをしていくことが大切ではないかと思われます。また、この年代は森に対する印象があいまいで好きになるか嫌いになるかの分かれ目かと思われます。

高学年においては学習要素の強いプログラムを行うことが多いのですが、その中でも印象に残ることは驚きや発見です。学習の中でも1つ2つクイズをいれ、身近なことと関連した話をするだけでもっと森に対して好印象を持ってもらえるのではないかと思います。